# 青楼世化通

上

報部庭梨著

ヲ6
3215

門ヲ8
3215

官許明治七年七月十八日

# 青樓半化通上之巻

寓言　服部應賀著

十五年三月一日寄
市島謙吉氏贈

夫衣紋坂の柳四方ふ靡ども此頃市中の垣衣ふ其色を奪ひて五葉の松も席内ふ根を張ざれば二階三階の枝葉ふ緑り茂るの水揚もなし大門ハ地獄の罪人を待さめふや更ふ鐵の堅固ふ建構けるゲ閻府の冥官觀鬼嗅鬼ふ附て鐵札を考べ浄頗梨の鏡ふ向ハせ業の秤ふ掛る

しゝども方今旧例あゝまつたく罪人ハ極楽ハ
活業を懇ハ諭さまゝて元の火宅へ蘇生らすれば
此川竹の苦界ハ流て泥水を呑亡者一人もなけ
れば衣々をつぐる明爲の頭いまゞ白くいゝ孫ど
鐘い上野も浅草も六時たゞりが居續して外い勘
定あゝまる暦ゝなりて細見もやゝの晦日ハ月を
見ば四角の玉子の厚焼くゝ開化を轉る吉原
雀大醉ハ入て夢ハ化して蛤となり忽ちハ洋
形の新規樓を吹建けまゞ此廓の苦労を保食

黒郎助殿も此先の苦労を助る見留も付ざハ
まて吉徳強力殿の異見ハ付て吼々ちゝと立退ば
跡ハ和光の宝珠もるゝ旭の尊像も今大見世の
主人を三階五階を持るゝ何四へあゝ無陀如来
と拜む時世といゝ言るゝ斯る縁るゝ衆生ハ
度がさゝと遂ハ大音寺の蓮臺ハ轉坐すれ
ばゝゝふてを又肉食妻帯の腥き香花ハ鼻
をゝる先て飲米浄土を念じても衰微ハ四宿
も一畑さゝれば是ゝら田を行も畔を行もかは

一連託生なりと旭丸屋の印をば解て拳ふ怪
道の汗を握る穴賢扨秋葉の燈明墓を
いまぞ洋人の渡来るき代ふ半髪の小髷人が
鼻の先を三尺棒より高く築て諸港の明に
魁して能ヲイラン海の闇を照せるば衝突れ
患もなく上氣の先頭多く船を山谷ふ繋
けもた上陸護送の提灯持も日本堤ふ絶
ざりしが火防の神燈も天〻降て火の雨
い防がるくや過年水道尻ふ火が付て尾解

の跡も失へば其光を馬道の時計屋の戸外
ふ移せ是ハ元傾城畧ふ立て放蕩戀暮の
閨を照せば今そ又開明進歩の人を照
せを煩悩の犬猫の眼ふい知や志〻ぬや仰
光陰の運轉を矢を射りも殊ふ早れば
一時を見るもふや二時ふるり昼とかり
ば夜とかり今日とつふ翌日となり一月二
月ハ夢の間ふ嫁が姑ふ成かるのい遅
きやうにも脚を早〻譬へ千万金を積とも

ども光陰の脚ばやく五厘も止らぬことを示せば
或夜此時計屋の前まで素見空過ふ臭唄
で来りし者此時計の針の運を詠て遊戯の費
を自らさらに其処より直ふ家へ戻りて夜業
の燈火ふ附しとわりしが是等い用明の光を見
て開明ふ進歩する難有人のためとも多くも身
上ばかりの懶惰者の中ふ学書も達者なれど
も身の行ひの悪きのみにて零落て居をもあしび親
の難義妻子とも顧ず他の金銭を自ものらて湯水の

如くふ遣ふあまび又其朋友らて其非義を諫ざるべ人
是を幸ひふ不正の品と知るべく質入の仲立抔して悪
処へ連立此奴等い鮑魚ふ集る青蠅ふまび諭せば
反て仇と為も大飯を喰ふ毒虫と見做て天の網ふ
かゝるを見よ都て人い且ふ起夕まで稼でさへ一胡の
活計い難きものを五銭七銭の儲さへ出来ぬ身が
他力の金銭を費して後ふ。警改心をまもまびらて人
あい寿の限りいまび空遣の金銭一代の中ふ取へ
まるべきやさまび一度の過一世の大瑕となるを

# 三品無

中品中娼
化言経の説
此女来ハ中等ノ煩悩買ヲ賒シテ三階ヲ持ト云
上品上娼
三分経の説
此女来ハ上等ノ縁客ヲ済渡シテ五階ヲ持シム ト云

# 陀女来

一切経一分
四貫文の説
下品下娼
此女来ハ下々衆生ニ悪縁フカク亡者ノ流勘定ニ身上リスレバ是ヲ已身ノ無陀トモ云

福者の貧賤ハ終ハ皆此光陰を去らぬが如へ爾る
ハ難有も追々学校盛ハなり市中見廻の燈火
庶人の善惡を明らハ照せば彼懶惰者の中ハ逼
迫て晩蒔るぐ蕃椒のやうなる筋をあらはして
人力車を引も一ツ又土番を荷もあまべ自然
田町の掛行燈も薄闇なり花街の万燈も既に
消かんとせしが舶来の石油金盛を次足バランプ
乱婦も又連々と夜景を持直して心底ハ水臭
ふも客ふチヤ火家油を浮せて盲時計の懐を

照し牛肉の且那。馬車らしく茲ハ光陰を費せ
し遊楼の油断忽大敵しハ終ハ牛馬解放の
筒袖ふむ〻ハ怖玉げと銃見世も又半焼ハ夢野
となり紙を喰さく牝鹿失まば夢をむまぶ牡
鹿も来ぬも〻遣手の鬼を角を折薺花ハ弦番
の家根ハ茂て翠帳紅閨ハ桃並べ金盛も吉
野竜田の花紅葉も夢と覚てハ跡もるやと哀
傷を調まべ二挺の鼓ハ簧輪狂の山彦なり一中
河東の猫の皮も紙袋を冠らまて戸棚の隅に

ニヤンの音もざさねば鐵漿漬ふ足を洗ふ幇間
虫もいる中へ又そろ〳〵藻ふ住虫のこまる〳〵立
戻る出稼ふ父母憑しと鳴音ハあるとも今日ハ
當家ふ網をかろ翌日ハ隣へ巣をかゝる女郎蜘
の自由より亡八虫の泣面を八人九人の一坐あり
てもの廣ひ籠ふ玉虫〳〵移ひ夜明を獨り待ぬ
けり斯る淋しき秋の夜ふ又圓々炎の沢山あるを
是一六の日ふ限がもへ其圓々のどんと澤山のく
を採て一六闐澤と藝者ふ謠ハせてどん〳〵と永

く願へども奢者ハ久し〳〵ひ人めも憑草も冬枯て
往来ハ廣くあるまども商賣ハ狹くあるより外の藝
者と船宿の苦情の爭ひ傳染して廓ふ茶屋と
貸座敷の苦情の爭ひ發ずが元より合持の生
活るれば間もなく和睦ふふる上ハ合互ふ凋む花の
渡世を開く時節もよりと旧暦の弥生ふ中絶の
桜を植込けまば其景色昔ふも劣らぬが也へ何人ふや
花の枝ふ〇春霄一六櫻價千金とかゝるを見て皆々
悦び此花今ふ盛〳〵ば一六の日の賑ひいかゞあらう

ぞと指折かぞへたのしみ多ふ四月下旬の六の日を爛
熟と花の意情も飜かつて客を待しふ豈斗らずも午
後より風雨烈しく電ひらめき聢も浅草の空ふ雷
つよく碾多多へ圓澤連中も此けんまくふ肝をひやして
元雷門のあたりより人力車ふ飛乗て家路へ急ぐ者
多々まゝ今を盛の花の廓も待客い来もせぬふ待ぬ
雷の声ふ怖て皆戸をさして失志々るが粤に猫屋又
六といふ茶屋の主漸く雷の遠く鳴を聞まして二階
の雨戸を押あけて見れば雲ふ月さゑゝゝお獨

夜桜を御見物ゐされば猫又恨りげふ空を詠て獨言
ふ元よりどんゝくを目的ふ植し一六櫻るまゝ雷の太鼓
持もせあてどんくとも叩ひてくるゝどんゝくの人寄と
もるゝきふ虻々カりくといろけのるひぞもごろ〳〵
かりくい茶屋商賣ふの大禁物其上圓澤様を追ち
すのゝるゝゝ人力車ふ銭をゝゝせお宅へ帰うかゝらぬう
ちふ又此ゝふ空を晴して銭もるひ月や星ふ素見
さまるも忌りき。斯花を見捨る野暮る風雷神此地
ふあるとも又吉野ふ花を愛護の御神あり其上吉原と

東櫻 半化通

服部應賀著

中乃山人

惺々暁斎画

吉野といふ名の縁あるのみならず吉野に「日本花「七曲坂「千本桜「妹背山、げまた吉原ふ又「日本堤「衣紋坂「千本格子容と女郎の妹背山ありん夫ふ對し彼方ハ花の名此方ハ色の名此花と色との名由合傘ふ逍まぬるゝ殊ふ吉野山ハ黄金の塊りなれバ金御嶽ともいふをさいわひ今一心ふ遥拝して此櫻ふ付て金儲を授らんと俄ふ口をそゝぎ硯を清めて蔵王尊へ手向の歌ふ〇東とハ川よりのぞつりふやこ茅町の山猫金を江戸桜ゟ飛して書そへて店先の櫻ふ結付千客万来急々入用如律令とぞ拝しける

半化通上之巻了

官許明治七年七月十八日

# 青樓半化通中之巻

寓言

服部應賀著

○

夫和歌の徳あい天地をも動し眼ふ見ぬ鬼神の心をも和ぐるとい宜ふる哉扨青樓の茶屋猫屋又六ふる者諸々の債ふせぐまれてやりくりさんざんもぎらり迫つ。脂煙筒とあり グウもスウも出ざるふ場より花を愛護の蔵王尊を祈けまい其夜八時頃ふ見世へ一人の客あり是いそも或縣下の士族

あて俳名を奉還齊家六とよび自ら通人風を吹
き名聞者あるが曩ゐ洋学修行のあゐ東京ゐ
来り或学校ゐ入て間もなきゐ此猫又の方ゐ
岡花屋といへ娼家ゐ入りもき流石野といへ娼妓
ゐ馴染て必用の洋書まを賣拂ひて修行に
怠りけるを終ゐ学校を放逐されて本國ゐ
立帰りしが今又茲ゐ来りけるもへ猫又ハ地獄で仏
を見る如くゐ悦び取あへず深閑とせ二階を
開きて花を斜ゐ褥ゐつけ酒肴をもてめて又六の

中

云誠ゐ先生の御身の上を殊ゐ御案ず申せ一処
能くて御出府ぐさせし此廓も追々衰微ゐ及び
先生當地ゐ出ゐるまで御明智を拝借して何成
とも金儲を致さんと思ひしゐ其甲斐もなくさん
御覧のごとく一六櫻を植ても此頃い諸人ゐ不風流ゐ
なりつさのゐ又学校で眼をあいさのゐ但しいかさんの
角が大いのく此花の盛ゐ一六といへどもどんさくのどんも
なるへ雷ゐまで商賣を妨げらるを是でいあどが干あ
がると一心不乱ゐ花を愛護の神を祈けるで其霊

験覿面ふ先生を授玉いつゝを誠ふ金箱を得
るゆ同じことと聞より家六の云イヤ僕ぶ身の上
ゆきつての如く流石野の憨情より計らひ古郷へ
立戻つゝが今般家禄奉還の金貨を請取し
ゆへ是を以て一簾の商方ふ就名を天下ふ顯さと
ふい當地ふ限るものゝ後月出府ふ及びゝぶ
迎ゆ洋学のべろくゝあてを埒があらぶ僕天狗俳諧
の一社を取建て全國へ羽をひろげて名を裏し又
諸邸の跡の地を拂下て其処へ山林ふ閑社ゝる神

体を遷坐ゝさめそゝふ付て金儲の工風ゆ
外山を穿て道ゝゝ道を掘ひて川とゝる目論
ゆ多くあるゝば其願書を夫々の御役場へ差出し
かけば今ふゆ其願が濟ゝきゝ大金儲いくゝゆあゝ
どゆ僕此廓へゝ若干の金を費ゝゝゝば商方の手
始ふ萬吉原の名ゆよけゝば是ゝゝ費ゝゝ金ふ利
を加へて取返ゝ事を見付ゝゝ此二階ふ止宿を
させよ扨今年此廓へ桜を植ゝゝい好で不景色と
招ゝゝ其仔細ゝゝゝい今年い戌の年ゝゝば犬櫻

犬の花面を人的殺の棒があると剛ひ[illegible]
其上花を見て犬をもあらる抔い三ッ子をさへも知
るものをそこらを氣が付び可惜大金を空花を
散せいい口惜こと聞よりう又六が云「何さそこをそ
快乎氣が付ませぬが先生此度商方の手始に
萬よ[illegible]原ゆゑ金儲をするを氣が付しい紀文
いさぶらの御明才都て凶あるを吉原ともいふ
譬ばり又人間萬事再往の尻馬を乗て鞭打
ときを千里を駈て金儲の山を登るとことも

中

あまたが此外る一六櫻の跡を又能金儲の目論ばり
其古例とうをい此七八年後の頃毎年の如く櫻を
植るが折悪く雨風繁くて桜い外しが其跡へ
花菖蒲を植しを殊の外景色がよゐ上或客人戯を
○濃色の黒を色まゐ菖蒲とうを発句を花を結付しを
藝者が見付て其発句を手を付て茶屋ぐゐ端謡をうひ
ゐれば里を色ますとうを文句が挑女客の氣をかをひ
て終を世上を弘り既を大門を打て人を計り
込やどの群集とるまをば内外の茶屋舟宿まを

都會ふ於て
不案内の
商法を猥ふ
目論者い
陥ふかつて
一代の
資本を
すり失ひ
家名子孫ふ
ひつそび

中

山林ふ農業して
都會の奢侈を
知らぬ者にそ
天道
嬢美を授て
子孫栄久

八

大金を儲けさ事が御坐候先生なんと此櫻の
跡へ花菖蒲を植る金主なり其菖蒲の端唄を
作りてそれと手拭ふ染させて貸坐敷をたゞめ茶
屋船宿藝者へ配當して其入費ふ八割の利足
を加へて毎日取立る事抔を私がゐ請合申上ハ
聊も御損いなく大金の儲こゝふ大門を打ち
も御名が世上へ高く引まれば是こそ兩手ふ黄
金の花菖蒲と辯舌を尽し候家六そろふ悦
て「イヤ此里ふての金儲い夫ふあり」其入費何

程かゝるや「さそれば菖蒲の植込が凡二百両手拭が染賃
ともふて凡百五六十両かゝる」「さそれば茲ふ持合て
奉還の賜金二百圓あるまゝ是を手金ふ渡せば何
くれの用意せよ跡金い僕ふ命をゝまる印とかの
流石野が指を切てもとせ其返礼として僕百五十両ふ
て求る金時計と百両ふて拵へる金無垢の喜
世留を無理ふ取上らるゝ其二品を右よく取か
して質物こゝ皆金を渡先仮請取と書ビ
と二百圓の證書をこゝて金をこゝし其硯ふて旧

暦の五月初旬より青楼ふ於て古今例ある花菖蒲の色競あるかりもきを四方へ布告する新聞紙の下書をさて夜中をも厭ず新聞社へ使を走せ夫より又白紙を手拭の形ふらくて自らひもくらする花菖蒲の画をかきちらし其上へ蛇が蚯蚓をひきつれて天上へのぼりあがる文字あるかき端唄の文句ふ○雲のくもひのふ白いものが見へるこれは家六が花菖蒲と云るせ手拭の雛形を又六ふ渡せば「イヤ先生さくのくもひのふ白いものが

中

見へるこれは家六の花菖蒲といふんとかりろくでさきさと此唄が今ふ流やつて云ると又大門をメ切て人を計てつまるわらの混雑とりまする爾し此節を三方が行抜ふるつていまゝ人死する事もたりまひへをその心配いまゝ安心さくば今しより開花屋へお供と云へば家六ハかゝりをとりて「イヤ流石野ふいかの二品を取返して手段ふさくユ風の事あるとば僕一人ふて行ふ付酒樽一抜ひきとりへば有合酒樽の薦をわどひてりさせば夫を身ふ紛ひて頬冠るぞして怪しげ

ふ姿をかくして流石野の方へと只一人出行けるは其翌日おいらまび新聞紙四方ふ配達しけるまび是を見る者い今度青樓ふ植る菖蒲ハ一六櫻の跡をつひで半化通人が一世一代ふ奉還の資本を亡ら殖まるのつぐ子を用ゐるりくろこあるまび是ハ誠ふ廓の一六菖蒲まぞのよ

青樓半化通中の巻了

下巻大尾早々發兌


万亭服部應賀著作

評判みそ樹男　諸藝畑水練
童女早学文　天上大珎車
金庫三代記　鬼びゑん語
東京花毛抜　當世利口女
日本女教師　孫兵衛活計論
馬鹿の大如樂　市の虎狩
近世あきれ蕎　天酢合ゝ傘
知恵の秤　新聞商方談
青樓半化通　ニヤアテウ談
虫類大議論　日本大國柱
權兵衛種蒔論　五幣うりき
驕人びつくり箱　心の道行
同後　びつくり帳面箱　流行美男かぐら
太郎衛水掛論　異形異物　各覽會　初

東京小説社書林

芝三島町　和泉屋市兵衛
北鞘町　弘文堂佐平
浅草町　鶴屋喜右衛門
馬喰町二丁目　山口屋藤兵衛
人形町　上州屋重藏
須田町　高木和助
通新石町　紀伊國屋德藏
大傳馬町三丁目　丸屋正五郎
両國元町　鈴木勘二郎
大傳馬町三丁目　星野松藏
駿河町　恵比壽屋庄七
本町二丁目　廣瀬新兵衛
花川戸町　相模屋七兵衛
浅草寺地内　大橋堂彌七
横濱　中屋銀二郎
小傳馬町三丁目　山嵜屋清七

西京書林 勝村治右ヱ門
大坂書林 秋田屋太右ヱ門
名古屋書林 永樂屋正助
甲府書林 藤屋傳右ヱ門
駿河書林 浪花屋市蔵
三島書林 堺屋又三郎
信州善光寺 小林屋喜太郎
越後新潟 [redacted]
同 白根 中村忠右ヱ門
同 三条 浅門傳右ヱ門
同 上野 [illegible]衛

越後三条 木名屋定吉
同 水原 島屋六平
同 長岡 島屋十郎
羽前山形 八文字屋太右ヱ門
同 荒井太四郎
同 高田為二郎
同 雁ヶ岡 地主屋文蔵
同 石黒屋助右ヱ門
同 加賀屋[illegible]右ヱ門
仙台 十九軒 菅原屋安兵衛
箱館 [illegible]

野州佐野 [illegible]忠兵衛
上州安中 [illegible]巻屋喜平二
同 高崎 菊屋源兵衛
下総佐原 正文堂利兵衛
同 千葉 浦屋[redacted]
武州浦和 藤瀧二
同 川越 [illegible]田屋文吉
同 八王寺 [illegible]屋徳二郎
同 横濱 岡屋伊兵衛
[illegible] 近江屋平吉